
小さなお客様

問道 火偉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

小さなお客様

【NNコード】

N8524M

【作者名】

問道 火偉

【あらすじ】

はじめに言つておく。これは恐い話じゃない。

都内のレストランで料理人をしていた俺は、ある日アパートに帰つてくると、隣の部屋の前で見知らぬ男の子と出会つた。腹が減つていたようなので、陽一という名のその子に料理を作つてやつたんだが、これが自分でも驚くほど美味しい出来だった。俺は次の日、シエフにその料理を店の新メニューにしたらどうかと提案した。すると、あっさりOKされただけでなく、知り合いの経営するフランスのレストランで働いてみないか、とさえ言われた。これも陽一に出

会えたおかげだと喜んだ俺だが、同時に悩みもした。フランスに行くと、あいつを日本に置いていかなきやならなくなる。それはあまりにも可哀想だ。日本に留まろうか悩みながらアパートに戻ると、陽一の姿が消えていた。そこで俺は初めて陽一の正体を知った。

もう一度言つておく。これは恐い話なんかじやない。恐い話で肝を冷やしたあなたに送る、心温まるホラーストーリーだ。だからどうかお願ひだ。恐がらないで……

「くそ……」

俺は階段の踏み板を思い切り蹴りつけた。「ガン」という大きな音が響き、鉄製の踏み板が小さく震えた。俺の体も怒りで震えていた。

フランス料理の店で働く俺は、店の日玉になると思って考案した新しい料理をシェフに味見してもらつた。だがシェフは「この料理にお前にも足りない物がある」と一蹴した。

意味が分からぬ。料理学校でもトップの成績だった俺に足りない物なんてない。あの料理だつて完璧だ。絶対うちの客層に受けれる味なのに。あのシェフの舌はおかしい。でなきや俺の才能にひがんでるんだ。

「く……」

俺はもう一度階段を蹴り飛ばそうとして止めた。

こんな夜遅くに騒いでたら近所迷惑だ。一階の大家に怒られるかもしれないし、大人しく部屋に戻ろう。

そう思つて一階の廊下に上ると、隣の部屋の前に見知らぬ子供が座つていた。

四五歳ぐらいのおとなしそうな男の子で、体はひどく痩せている。俺を怯えたような目で見て、体をガタガタと震わせていた。顔なんて真つ青だ。たぶん、俺がさつき大きな音をたてたせいで怯えているんだろう。

謝つておくか……

「悪かったな。別にお前に怒つてたわけじゃないから安心しろ。ちよつと仕事で嫌なことがあってむしゃくしゃしてたんだ……」

俺がそう言うと、男の子は安心したのか、こくんと頷いて体を震わせるのをやめた。俺も少しホッとした。

男の子の前を通り過ぎ、自分の部屋の鍵穴に鍵を差し込みながら、ちらりと男の子を見た。男の子は自分の足元をジッと見つめるようにならずくまつっていた。その横顔はどこか寂しそうで泣いているようにも見えた。

あの子供はなんだろ……

隣の部屋は俺が入ってくる前から空き部屋だから、誰かの帰りを待っているというわけではないだろ。なら家出か？ もしくは捨て子とか？ 問題のある家庭つてのは本当にあるもんだな。まあ、どうせ他人だ。俺には関係ない。

そう思つて部屋に入ろうとした時、

”ぐうう～”

男の子の腹が盛大に鳴った。

もう一度、男の子の方を見ると、俺と目を合わせないよに顔を背けていた。よほど恥ずかしかったのか、さつきは真っ青にしていた顔を、今度は耳まで赤くしていた。

「なあ、おい。お前、腹減つてんのか？」

俺がそうたずねると、男の子は慌てて首を横にふった。

「いや、でも……」

今度は千切れんばかりの勢いで首をふった。

「……腹へってんなら、俺のとこに來い。こつ見えてもプロの料理人だからな。美味しいもの食わしてやるよ」

俺がそう言うと、男の子はこくんと小さく頷き、そばに寄つて來た。

別に放つておいても良かつたんだが、なぜかそれが出来なかつた。

単なる同情か、あるいは育児放棄されたこいつに、上司に評価されない自分を重ねたせいかも知れない。

ドアを開け、男の子と一緒に部屋に入り、明かりをつけた。そこで初めて気がついた。

「こいつ……何で格好してるんだ……」

男の子は異常に汚れていた。服は何日も洗濯していないのかすっかり黒ずんで、風呂にも入っていないのか、体も垢だらけだ。後で風呂に入れてやろうと思い、奥の居間まで連れて行き、テーブルの前に座らせた。俺はキッチンに行き、料理を作り始めた。メニューは、あのシェフに否定された、まだ名前もない新しい料理だ。見た目こそハンバーグのようだが、肉にスパイスをきかせ、ワインベースのほろ苦いソースで高級感を出している。ただ、これは大人向けの味付けだから、そのまま出してあの男の子には苦味が強すぎて食べないだろうな。ソースだけでも甘いものにしてやろう。これなら食べられるだろう。

「まあ食え」

料理を皿に盛り付けると、それを男の子の前に出した。

こくんと頷くと、いただきますも言わずに男の子は勢いよくたべ始めた。その顔はとても嬉しそうに見えた。

よつぽど腹が減っていたんだな……

そんなことを考えながら、俺は自分の分の料理を口に入れた。その瞬間、衝撃が走った。

「何だこれ……」

俺が考えた料理と同じ物とは思えないほど美味しい。ソースのベー

スになつていいトマトの酸味がしつこさを消し、甘みがスパイスのきつさを押さえ込んでいる。さつぱりと食べやすく、それでいてまろやかでコクが深い……

ソースを変えただけでいつも変わるものなのか？ 一瞬そつと思つたが、おいしそうに料理を食べる男の子を見て、違つとすぐに気がついた。

こいつのために作つたから美味しいんだ……

今までの俺の料理は、俺を評価してもらつたための、俺のための道具でしかなかつた。そんなものどれだけ美味かううが、お客様に出せるはずがない。

料理は料理人が評価されるために作るもんじやない。食べてくれる人を満足させるために作るものなんだ。料理のことしか……いや、自分のことしか考えてなかつたから、こんな当たり前のことを忘れちまつたんだ。そのことを思い出せてくれたこいつには感謝しないとな。

そんなことを思いながら、俺は男の子と料理を食べ終えた。我ながら美味しい料理だつたと、後片付けをしながら思つた。

「なあ、お前。名前は何ていうんだ？」

洗い物が終わり、居間に戻つた俺がたずねると、男の子は気まずそうにもじもじするだけで何も答えなかつた。思えば、こいつは何も言葉を喋つていない。

ひょつとして口がきけないのか？

そう思つた俺はスケッチブックとペンを男の子に手渡した。不思議そうな顔で男の子はそれを受け取つた。

「それなら、喋れなくても文字でお前の気持ちが伝えられるだろう」男の子はまぶしいほど明るい笑顔で頷いて、スケッチブックに何

かを書いた。

(ありがとう)

「バ、バカ！ 礼とか別にいいから、名前教えるよ…」

急に照れくさくなつて思わず顔を背けた。それがおかしかったのか、男子は小さく笑つてページをめぐり別の言葉を書いた。

(陽一)

今度こそ名前のようにだ。

「なあ、陽一。お前、何か食いたい物はないか？」

(もうおなかいっぱい)

「今じゃなくていいんだよ。明日にでも作つてやるから、何かリクエストはないか？」

陽一はページをめぐるとすぐには書き出さず、少し考え込んだ。どうやら何をリクエストするか決めかねているようだつた。

何でもいいんだぜ……

陽一のリクエストなら何でも作つてやる。それは同情などではなく、大事なことを思い出させてくれたせめてもの礼だ。

陽一は何かを書いた。どうやら、リクエストが決まつたようだ。

(プリン)

「プリンか……」

出来ないことはないが、俺の本職はパーティーシエージャない。そんなに美味くできる自信がない。どうせなら、俺の得意な分野の料理にして欲しかつたが……

微妙な顔をした俺の心中を察してくれたのか、陽一はページをめぐり別の物を書いた。

(プリン)

同じ物だった……どうやら、この小さなお客様はたいへん強くプリンをご所望らしい。

「どうして、プリンがいいんだ？」

(プリンをたべると、おねがいがかなうの)

「そんなおまじない聞いたことないけどな……ちなみに、どんなお願いをするんだ?」

(しゃべれるようになりたい)

「……！」

(しゃべれるようになつたら、おにいちゃんにつたえたいことがあるの)

そんなことを言われたら作らないわけにはいかないな。

「よし! ジャあ、お前のお願いがちゃんと叶うよう、とびきりおいしいプリンを作つてやるか」

陽一はまぶしいほど明るい笑顔で頷いた。

俺はその後、陽一を風呂に入れて一緒に布団で眠ることにした。

陽一の体は小さく、けれど暖かく、久しぶりに感じた人のぬくもりに、俺は優しい気持ちになれた。人を思いやるということは当たり前のことだけ、凄く大切なことで、そして幸せなことなんだな。

翌日。仕事が終わると、俺はシェフにもう一度あの料理の味見をしてもらつた。陽一のためにと味付けを変えたものだ。

シェフは一口食べると、満足そうな笑みを浮かべた。

「いいな。前のどげどげしさが取れて、味に丸みが出ている。自分に足りない物が何か分かったのか?」

「はい。俺は自分のことばかり考えて、料理を食べてくれる人のことを考えてなかつたんですね」

「そうだ。俺たち料理人は料理を食べててくれた全てのお客様に満足してもらえるよう、ちょっとした気遣いと工夫が必要なんだ。要は思いやりだよ。料理を食べたお客様に笑顔で「ごちそうさま」と言ってもらい、そのお客様を笑顔で見送つて初めて一流の料理人だ。そのことに気づいたお前は一人前だ。そのお前が作った料理だ。店のメニューに加えよう」「

「ありがとう」ざいます！！」

俺は深々と頭を下げた。俺の考えた料理が新しいメニューとして店に並ぶ。こんなに嬉しいことはない。だがそれ以上に、シェフに一人前だと認めてもらえたことが嬉しかった。シェフは俺のことをちゃんと見てくれていた。

ちゃんと評価しないとか、自分の才能に妬んでるとか、くだらないことを考えていた自分が恥ずかしい……

俺はもう一度シェフに深々と頭を下げた。

「シェフ、こんな俺なんかに色々と教えてくださつてありがとうございます！！」

「何だよ、お前……いつもは生意気な態度してるくせに、今日はやけに殊勝じゃないか。何かあつたのか？」

「はい。少し……」

「まあ何があつたのかは知らないが、礼なんて別にいらないよ。お前なんて俺から見ればまだ子供だ。その子供を見守つて色々教えてやるのは大人として当然の義務だからな」

そう言つてシェフは俺の頭にポンと手をおいた。その手は大きく、暖かく、まるで親父のようだつた。そんな人がすぐ近くにいて、俺のことを見守つてくれていたことが嬉しかつた。

けど嬉しいことはそれだけじゃなかつた。

「ところで、お前フランス語はできるか？」

「ええ、日常会話と料理関係の専門用語ぐらいは話せますけど……それが何か？」

「よし、十分だ」

「……？」

「料理修行とかじやなく、一料理人としてフランスでやつてみないか？」

「え！？」

突然のことでの何を言われているのか分からなかつた。

「フランスで店を経営している友人がいてな。そいつがお前の才能

を高く評価して是非うちで雇いたいって前からうるさかつたんだ。ただ、お前は自分のことしか見えてないところがあつたし、料理の腕だつて本場で通じるかどうかは正直賭けだ。だから、黙つていたんだが……今のお前ならやつていけると俺は思う。お前は才能もあるし努力家だからな。まあ、挫折するかもしれないが、それはそれでお前にとつていい経験になるだろう。どうだ?」

「えつと……」

本場フランスで料理人としてやつていく。それは俺にとつて一つの目標であり、その目標に手が届きそうなこの話が嬉しくないはずがなかつた。正直やつていく自信もあつた。シェフもいけると言つてゐる。昨日までの俺なら何も考えずにこの話に飛びついただろう。だが、今の俺は答えに迷つた。

「何だ? 自信家のお前でもさすがに腰がひけたか?」

「あ、いや……」

「まあ、日本に残つてもう少し腕をあげて経験をつんでから行くつて手もある。どちらにすむかはお前が決める」

「はあ……」

「返事はいつでもいいから考えておいてくれ」

「はい……」

生返事をして俺はレストランを出た。

帰り道。ずっとフランス行きの話のことばかり考えていた。

やつていく自信はある。もちろん不安もあるが、どこまで自分の腕が通用するのか試してみたい気持ちがそれを超えていた。だが、どうしても気がかりなことがあつた。

陽一のことだ。

フランスに行くとなれば、あいつを児童養護施設に預けなければいけない。

自信があるとはいえ、成功するか分からぬフランスにあいつを

連れて行くことはできない。そんな無責任な真似をして、あいつにひもじい思いをさせたくない。親に返すのも嫌だ。陽一はきっと家庭に何か問題があつて家を飛び出してきたか、あるいは捨てられたんだ。そんな家庭に送り返すわけにはいかない。

施設ならあいつがひもじい思いや寂しい思いをすることはないだろう。だが……

だが、それは俺が嫌だ。

俺が変われたのはあいつのおかげだ。その恩人をフランスに行くので施設に預けるというのは、引越しするから犬を捨てるというのと同じじゃないか？　あいつはペットじゃない。人間の子供なんだ。日本に留まつてもう少し腕を磨きながら陽一を育て、あいつがバイトして一人でやれるようになつたら、フランスへ行こう。俺はまだ若いし、未熟だ。それからでも遅くはない。

そう自分に言い聞かせながら、アパートに帰ることにした。陽一のために作ったプリンの箱がやけに重い……

「ただいま……」

少し浮かない気分でアパートのドアを開けた。陽一の返事はなかつたが、奥にいるだろうと思つた。

「陽一……？」

だが、奥の居間に陽一の姿はなかつた。俺はプリンの入つた箱をテーブルの上に置いて、ベランダのドアを開けた。

「陽一！」

だが、そこにも陽一はいなかつた。

「陽一……」

「風呂にも……」

「陽一……」

「トイレにも……」

「陽一……」

どこにも陽一の姿はなかつた。嫌な胸騒ぎがした。

どうして陽一はいなくなつたんだ？　まさかあいつの身に何かあつたのか！？

俺は慌ててアパートの階段を駆け下り、一階の大家のドアを乱暴に叩いた。

「大家さん！！　大家さん、ちょっとすいません！！」

すぐにドアは開き、中から大家のおばさんが面倒臭そうな顔で現れた。

「あら、どうしたの？　そんなに慌てて」

「男の子を見ませんでしたか！？　四、五歳ぐらいの瘦せた子なんですけど！！」

「…………あなた、その子を見たの…………？」

陽一のことを言つた途端、大家さんの顔が青ざめた。だが、そんなことが気にならないくらい焦つっていた俺は、大家さんの肩を掴んで怒鳴り散らした。

「俺が見たのかつて聞いてんだよ！……」

「落ち着いて！……」

大家さんは俺の手を振り払うと、怯えたよつた目で俺を見つめてきた。大声で怒鳴つたせいだと思い、謝りうとしたがそうじやなかつた。

「あの子はね…………」

陽一は…………死んでいた。

俺と出会つて二年も前に。

陽一は幽霊だつた。

三年前。俺が住んでいる隣の部屋に若い夫婦と小さな子供の三人

で暮らしている家族がいた。その子供が陽一だ。陽一は生まれた時から誰とも話したことがなく、そんなあいつを両親は気味悪がり、ある日あいつを置いて出て行つた。陽一は帰つてくることのない両親をずっと待つていた。恐らく親に「そこにいる」とでも言われ、腹が減つても物音一つ立てず、ジッと待つていた。人の目に触れられにくい押入れの中で……そして、そのまま腹をすかして死んでしまつた。あいつの死体が見つかったのは新しい入居者が押入れを開けた時だつたという。

その話を聞いた俺は、驚きや恐怖より、怒りや悲しみで頭が変になりそうになつた。

どいつもこいつもふざけやがつて……どうして、誰もちゃんとあいつのことを見てやらなかつたんだ……！　あいつは話さないんじやなくて話せないんだよ……！　そのぐらい親なら分かれよ……！　大家もどうしてちゃんと部屋を調べなかつたんだよ……！　そうすれば、あいつが残されていることぐらい分かつたはずだ……！　誰かがどこかであいつのことを、もう少し、ほんの少しでも見ていれば……シエフが俺を見てくれたようにあいつを見てくれば……あいつは……死ななかつたかも知れないのに……

そう思つた時、俺はアツとなつた。

『どうせ、他人だ。俺には関係ない』

最初に陽一を見た時、俺もそんなことを思つた。俺も人のことは言えなかつた。俺みたいな自分のことしか考えない大人たちが、あんないたいけな子供を殺してしまつたんだ……子供を見守るのが大人の義務のはずなのに……

どうしようもなく悲しくなり、涙を流しながら部屋に戻ると、テーブルの上に置いてあつたスケッチブックが目に留まつた。陽一にあげたスケッチブックの一枚目に書かれた（ありがとう）の文字がひどく悲しく見えた。俺はそのスケッチブックを手に取ると、陽一の頭をなでるようにな（ありがとう）と書かれた文字をなでた。

陽一は俺に色んな物をくれた。ギスギスした俺の心を和ませてくれた。ほんの少しだが、家族が出来たみたいで暖かい気持ちにもなれた。あいつは俺を変えてくれた……その礼も言つてないのに……他にも言いたいことや、教えてやりたいこともありますのに……お前はどうに行つちまつたんだ、陽一……

寂しさを紛らわせるため、陽一が一枚目に書いたあいつの名前を見ようと思つてスケッチブックめくつた。

「…………

そして愕然とした。そこに書かれていたのは（陽一）ではなかつた。

（あいつがどう、ボクのことをこわがらないでいてくれて）

「あいつ…………

俺は逸る気持ちを抑え、スケッチブックを慎重にめくつた。

（あいつがどう、ボクにやさしくしてくれて）

「…………

俺はゆうべつとページをめくつた。

（あんなにやさしくしてくれたの、おこひやんだけだった）

「…………

それは裏を返せば誰にも優しくしてもらえなかつたということだ。

俺はそれがなぜだか無性に悔しかつた。

（ボクはおにいちゃんがだいすき。だからボクは……）

「……！」

次のページをめくつた瞬間、スケッチブックを持つ俺の手が震えた。いや、全身の震えが止まらなくなつた。

（ボクはてんぐにこきます。おにいちゃんがフランスにいけなくなつちやうのはイヤだから）

あふれ出した涙が止まらなかつた。あいつは全部知つていた。俺がシーフにフランス行きの話を持ちかけられ、そのことで陽一のために日本に留まろうかと悩んだことも、全部。だからあいつは消えたんだ。俺の迷いを消すために。本当は俺よりも、誰よりも、あいつが寂しいはずなのに……ずっと一人ぼっちだったはずなのに……（おにいちゃんならフランスに行つても大丈夫だよ）

（だつて、こんなにおいしいプリンを作れるんだもん）

「おいしいプリン？　あいつ、食べたのか？」

プリンの箱を開けると、中の容器が一つだけ空になつていた。

一人で先に食べやがつて……

（おにいちゃん……フランスでもたくさんがんばつてね……）

（ボクもたくさんおうえんするからね……）

(おいしそうプリン、ありがとう……)

(それじゃあね……バイバイ……)

最後の方は文字が滲んでいた。その滲んだ文字に涙を落とし、また滲ませてしまった。

バカ……俺はまだお前に教えることがたくさんあるんだよ……食わしてやりたい料理だつてまだまだあるんだよ……なのに、勝手に行つちまいやがつて……

「そう言えば……」

俺は箱の中に残ったプリンを見て、ふと思いついた。

(プリンをたべると、おねがいがかなうの)

(しゃべれるようになりたい)

(しゃべれるようになつたら、おにいちゃんにつたえたいことがあるの)

あいつの「伝えたい」とは何だつたのか……それすらも、分からないまま俺は一人で残つたプリンを食べた。陽一はおいしいと言つてくれたが、一人で食べると、おいしいとは思えなかつた。

「陽一……俺はお前と一緒に食べたかったよ……おいしそうに食べれる……お前の顔を見たかつた……そして……」

そつづぶやいた時、小さな手に肩を叩かれた気がした。そして、陽一の書いたあの言葉を思い出した。

(プリンをたべると、おねがいがかなうの)

まさか、俺が陽一に会いたいと思つたから……それでプリンを食べたから……本当に……

「陽一……？」

だが、後ろを振り返つても陽一の姿はなかつた。ただ、

「クスクス……」

小さな男の子の笑い声が聞こえ、その声が俺の耳元で「つづぶやいた。

「『』ちやうせまでした」

あいつ……せつかくの願い事をこんなことに使つやがつて……俺

の一番言つて欲しかつた言葉を言つてくれやがつて……ありがとう、
陽一……お前は最高のお客様だつたよ……だから、いつか俺が店を
構えるぐらいの料理人になつたら……その時はまた化けて出て来い
……腹いっぱいになるまで美味しいもの食わしてやるからさ……

俺は天井の向こう側の夜空を見上げ、

「またのご来店、心よりお待ちしております……

小さなお客様を笑顔で見送つた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8524m/>

小さなお客様

2010年10月8日11時44分発行